

井の頭池のカイツブリ

2023年繁殖まとめ

つがい数が**最多**

一方、ヒナ数の**減少**も

井の頭池では2023年はカイツブリのつがい数がこれまでで最多となった。一方でヒナの数も減少した。2023年のカイツブリの繁殖結果を中心に報告する。

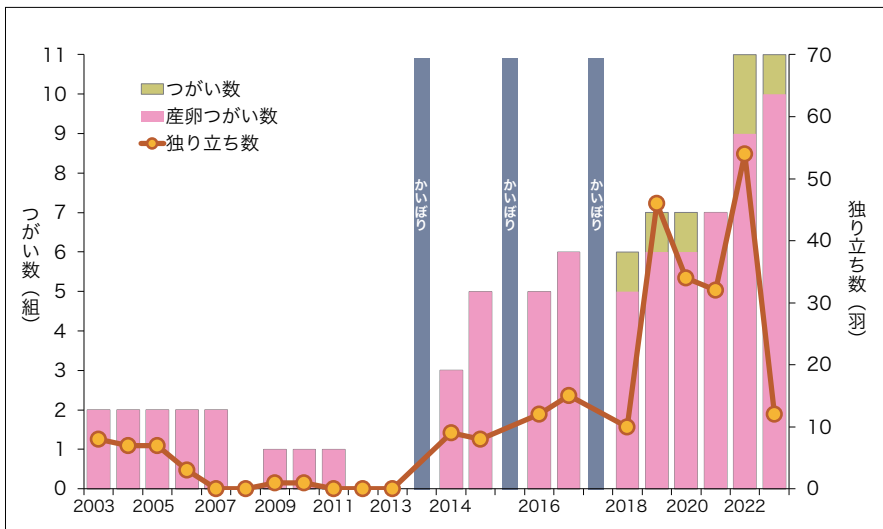


図1. カイツブリのつがい数、独り立ち数の推移
※孵化してから1ヶ月後に生存していたものを独り立ちと見なした。

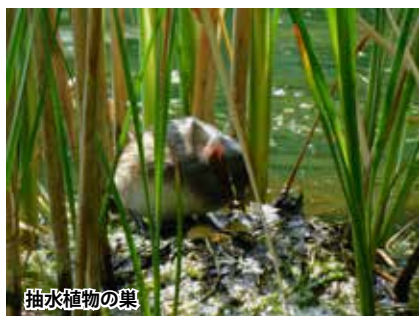


表. カイツブリの営巣環境タイプごとの営巣数 (2016年~2023年)

	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
水面に垂れた枝	10	14	3	12	8	10	10	8
抽水植物の茂み			2	4	3	7	11	17
開放水面 (沈水植物上)				1	6		3	
その他		1	1	3	5	2	3	2
合計	10個	15個	6個	20個	22個	19個	27個	27個

かいぼり後につがい数が増加
2023年は井の頭池では、カイツブリはこれまでで最多の10つがい産卵した。
井の頭池では、かつて外来魚の増加によって小魚などが減少し、それを食物とするカイツブリの繁殖が途絶えた時代がある。2014年にかいぼりで外来魚を駆除した後にカイツブリは繁殖を再開し、2回目以降のかいぼりでオオクチバスとブルーギルを根絶するとカイツブリの繁殖数が増加していった。
井の頭池のカイツブリは、ウキゴリなどの魚類ばかりでなく、エビ類やトンボ類も捕食している。こうした生物が回復したことにより、カイツブリは多様な生物の中からヒナの成長に合ったサイズのものを利用できるようになった。

変わってきた営巣環境
カイツブリは一般的にヨシなどの抽水植物の茂みや、水面まで伸長した沈水植物の上に浮巣を造る。かいぼり前の井の頭池には水草がほとんどなかったため、カイツブリは水面に垂れ下がった枝に巣材を絡ませて営巣していた。こうした水面枝の巣は、強風や急激な増水によって損壊してしまうことがある。
かいぼりの際に「浅場」を整備するようになってからは、池畔にヒメガマなどの抽水植物の茂みが徐々に広がっていった。2018年に初めて抽水植物の茂みに営巣してからは、強風などへの耐性が高い抽水植物での営巣が増加している。住宅事情が好転したこともカイツブリのヒナ数の増加につながっている。

今号の
イチオシ!

自然情報



ニホンスッポン

かいぼり後に目撃頻度が増えたカメ。晴れた日に杭や水草の上で日光浴します。夏には首を伸ばして水中を泳いでいる姿が見られることもあります。

東京都レッドリスト (北多摩) 絶滅危惧Ⅰ類



ギシブナを食べるカイツブリ幼鳥



カイツブリの観察を楽しむ来園者

ヒナの増加傾向にかげりも…
2023年は、産卵つがい数は増加した一方、独り立ち数は前年よりも落ち込み12羽となった。抱卵期間中に卵が消失したことなどが続いた影響が大きい。消失要因は不明である。従来は8月後半まで続いていた繁殖期間も、2023年は7月までと短かった。近年は15羽程度が見られていた越冬個体も、今期は8羽以下だった。独り立ち数や越冬数の減少が一時的なものであるのか、2024年の繁殖シーズンのモニタリングで確認していく。

繁殖ゼロから
都内有数の繁殖地に



絶滅の恐れのある野生生物の生息状況をまとめた「東京都レッドリスト」で、「カイツブリは絶滅危惧Ⅰ類(北多摩)」となっている。地域の水辺環境の悪化が進む中、井の頭池では自然再生の取組によってカイツブリの繁殖状況が好転し、都内有数の繁殖地になった。



作業を楽しむ参加者



作業後にやって来たオオパン



イベント後の湿地で記念撮影

いけいけ! かいぼり隊

～良質な湿地をつくる! の巻～

かいぼりのときに整備した浅場が、良質な湿地環境になってきた。利用する動植物も増え、サジオモダカなどの絶滅危惧種も生育している。水深が深いため湿生植物の生育に適していない箇所には、かいぼり隊が地盤の高い部分から土を移し、水深をちよつどよく整える作業を続けている。
2月には初めて湿地整備作業を一般参加イベントとして実施した。井の頭池の湿地整備に参加できるチャンスとあって、小学生から大人まで14人が参加。ぬかるみにもくじけず土を運んで湿地整備を満喫した。
湿地の作業では、その後の経過を観察する楽しみもある。整備した場所に植物が生え、水鳥がやって来るのを見るのはうれしいものだ。あの場所はどうなっただろうか…と気になり始めたら、あなたもきっと、湿地から抜け出せなくなっている。

